

創外固定法による変形矯正

座長：中 瀬 尚 長

近年のこの分野の進歩は、デバイスや手法の改良により目覚ましい進歩を遂げつつある。今回の発表においても、仮骨延長法を巧みに駆使し、複雑な変形を矯正することにより、画期的な機能改善が獲得されている報告がなされていた。大阪市立総合医療センター整形外科の香月憲一先生は、内反肘を伴う前腕内反変形を特徴とする ulnar forcal cortical indentation の 2 例に対し、尺骨の仮骨延長を行い、延長仮骨部を一期的に矯正して橈骨頭脱臼を整復し、他の手法よりも良好な成績が獲得されたことを報告されている。また、奈良県立医科大学整形外科の中野健一先生は、多発性外骨腫症 14 例の前腕変形に対し、仮骨延長と矯正を行い、整容面・機能面の双方で良好な成績が獲得できたと報告されている。いずれの報告も、前腕機能の再建プランの中に、創外固定法による仮骨延長を上手く取り入れられており、術者の独創性あふれた創意工夫が伝わってくる発表であった。創外固定による仮骨延長の最大の問題点は、刺入部感染を始めとする様々な合併症と、煩わしいデバイスを装着する期間の長さである。本手法を適応するに際し、合併症の発生リスクや装着期間をある程度事前に提示して、インフォームド・コンセントを行うことは、担当医に課せられた当然の義務ともいえよう。兵庫県立こども病院整形外科の小林大介先生は、対象疾患を 3 群に分類し、装着期間に関する傾向と、合併症の発生頻度を提示された。今後もこのようなりスクマジメントを念頭に置いた疫学的研究が、多施設で行われるべきであり、その先駆的な発表として、非常に印象深いものであった。国立大阪医療センター整形外科の北野元裕先生は、DDH やペルテス病後の大転子高位を伴う大腿骨短縮例 3 例に対し、大転子下降術と femoral neck lengthening osteotomy を行い、全例において中殿筋筋力と歩容の改善が獲得されたと報告された。股関節病変を伴う下肢長等長化の戦略として、成長抑制術が間に合わないような年長期におけるオプションとして、本方法が有用であることを強調され、素晴らしい結果を提示されていた。8 プレートによる Guided Growth は、最近の小児変形矯正分野における最大のトピックスである。本セッションでは本方法のパイオニアである Utah 大学の Stevens 先生が直々に演者となり、chondrodysplasia の多レベル手術について具体例をたくさん提示された。弾力性のあるプレートをヒンジとし、成長軟骨における成長を仮骨延長のごとく利用して変形を矯正し、一切の骨切りを不要とした本手法は、しばらく討論の中心に座り続けることであろう。最後に、京都府立医科大学整形外科の吉田隆司先生は、成長期と成長完了期の骨切り部のインピーダンス値(Z 値)について検討され、成長期例では、治療早期から Z 値が高くなる可能性を示唆された。以前からの歴史ある興味深い研究テーマであり、今後の更なる発展を期待したい。